

福岡県の陶磁器流通

佐藤 浩司（北九州市芸術文化振興財団）

1. はじめに

近世に肥前陶磁器が全国流通を果たす中で、九州島の最北端にあり日本海側諸国、瀬戸内海側諸国への通廊的位置にある福岡県とくに東半部豊前・西半部筑前での陶磁器様相を明らかにするには、肥前陶器にわずかに遅れて生産が始まった上野・高取系陶器の動向を合わせ鏡的に対比することで、肥前陶磁器の流通とそれが果たした役割をより鮮明にとらえることができるを考える。ここでは近世陶磁器出現期の様相を中心に概観してみる。

2. 豊前国での肥前陶磁器の様相

豊前小倉城郭や城下町の発掘調査から肥前陶器出現期を考える場合は、在地産の陶器である上野・高取系陶器や明・李朝陶磁器などの貿易陶磁、備前・瀬戸・美濃など国産陶器の出土状況を一緒に見ていくなかで、その様相を把握することが重要と考えた。

小倉城新馬場跡1号井戸出土の陶磁器を検討した結果（図1）、肥前磁器が含まれず、肥前陶器灰釉皿が胎土目しかみられないこと、明の景德鎮青花や漳州窯系青花が含まれ、李朝陶器がみられないこと、上野・高取系陶器が全器種の5分の1以上を占めていること、それに対して肥前陶器は4%にも満たないこと、むしろ備前や瀬戸・美濃系陶器のほうが多いことなどがわかった（図2）。

この井戸は曲輪形成土層との関係や、慶長年間絵図との照合から、また京都系土師器の多量出土から、小倉藩主交代期の武家儀礼や饗宴に伴う遺物と判断でき、1620年代前半期におけるものと考えた。よって、在地産の上野・高取系陶器は生産開始当初から陶器の主体を占め、肥前陶器は少ないと、肥前磁器の出現は1620年代後半以降であることが想定される。これは、次の時期における小倉城御蔵跡D10出土遺物（図3）に1630～40年代の肥前陶磁器が多数含まれること、肥前陶器の砂目溝縁皿（44, 45）を含むことと好対照をなし、豊前国での陶磁器様相を物語るものであろう。

3. 筑前国での肥前陶磁器の様相

筑前黒崎城下町では黒崎城築城以前の土層（～1604年）から築城？存続期（1604～15年）、廢城から宿場町への変遷期（1615～38年）の陶磁器様相が重層的に把握できたが、上野・高取系陶器は築城開始以前の7面、6面（畠土）でも主体をなしており、肥前陶器胎土目皿が含まれていた。また肥前陶器の砂目溝縁皿も整地層5から1点出土しているが（図4-27）、肥前磁器はもちろんなく、その上層の5面においても確実に伴うものはない。

ところが、博多遺跡群では33号土坑（図5）から小倉城御蔵跡と同一様相の肥前陶磁器が出土したが、上野・高取系陶器（534、549）は極端に少なく、おなじ筑前でも黒崎城下町とは様相が異なる。

4. おわりに…日本海流通の特質

近世陶磁器の一大生産地・肥前を至近距離にもつ福岡県域の陶磁器流通（図6）には、上野・高取系陶器という少なくとも肥前磁器より以前に出現した在地産陶器があることにより、同じ日本海域他都市にみられる肥前陶磁器の器種比率や在地産陶器との拮抗関係、また流通形態などに差異があるのは当然であろう。今回の集会では、各地の肥前陶磁器出現期の様相に力点がおかれ、環日本海域の流通実態や港湾、中継地でのあり方、陸路との関連や海運業者の動きなど、多角的視点での報告や討論ができなかつたが、今後とも在地産陶器を基底にすえ、肥前陶磁器の流入状況や他地域への遠隔地流通に海路が果たした役割などを検討し、近世日本海域における陶磁器流通を考えていきたい。



図1 1号井戸出土遺物種別グラフ

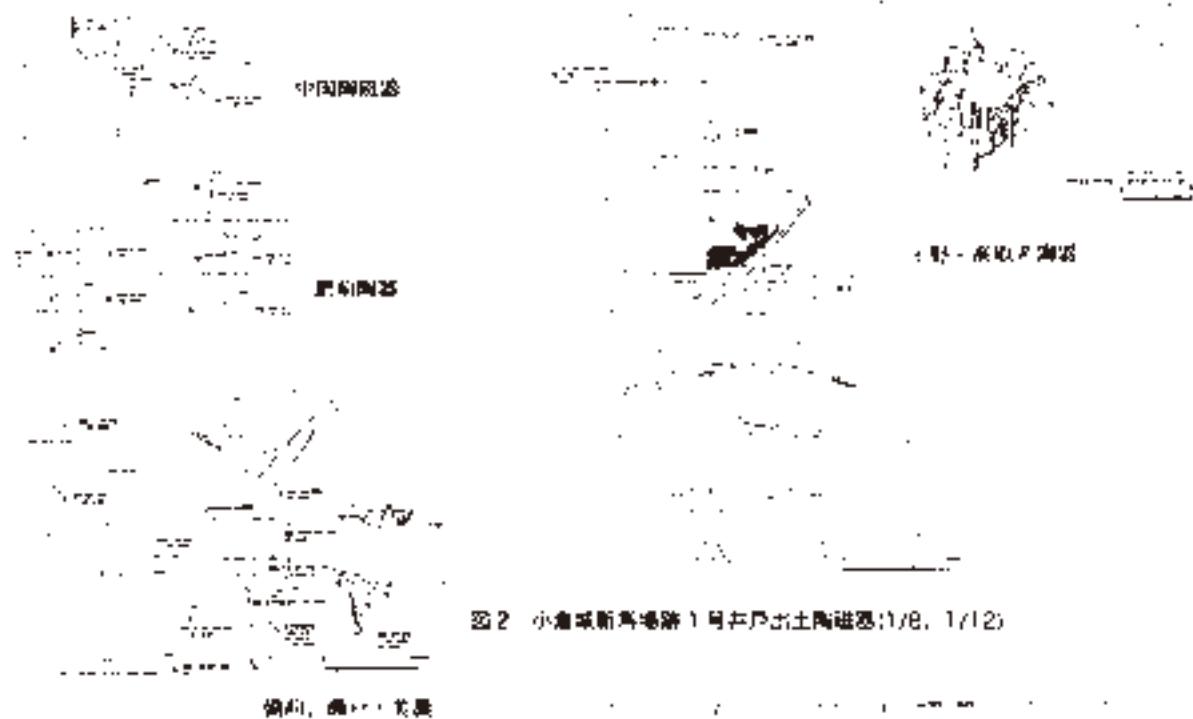


图2 小角城新兵墙第1号井口出土陶罐器(1/8, 1/12)

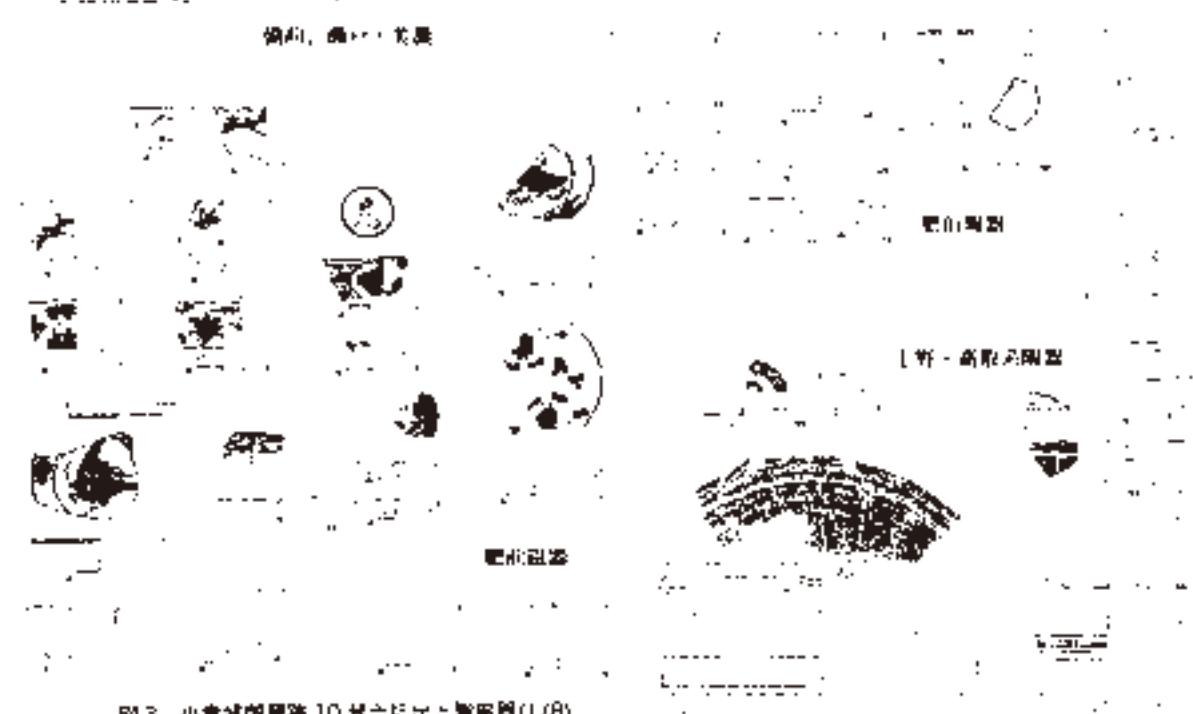


圖 3 小倉城西櫓第 10 号手標尺上繪圖 (1/8)

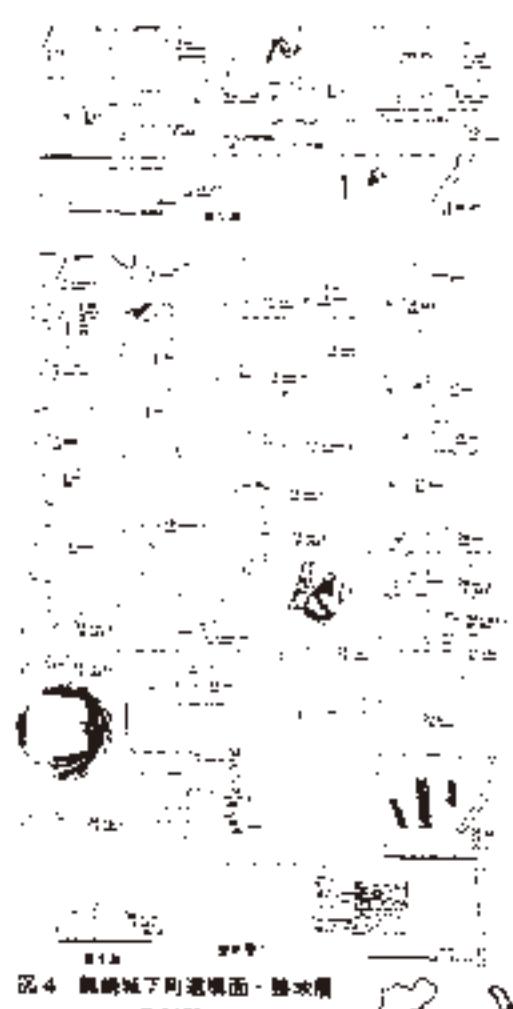


図4 舞鶴城下町遺構面・墳塚層
出土構造図(1/8, 1/12)

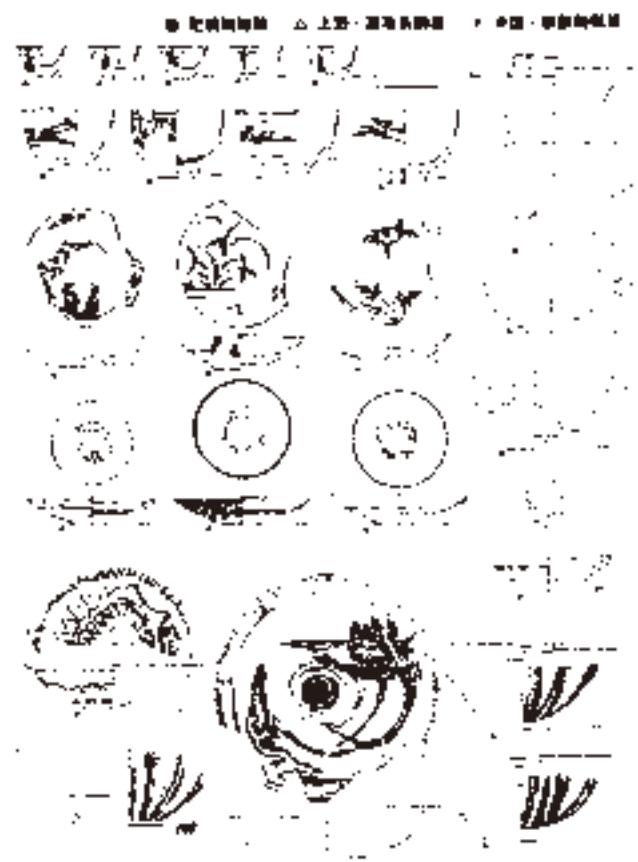


図5 池多遺跡群89次33号古坑
出土陶磁器(1/8, 1/12)



図6 上界・舞鶴城下町遺構の分布と周辺遺跡・遺跡図(約1/600,000)